

Sula の円環性

呼応する二つの眼差し

石井 澄子

日本大学大学院総合社会情報研究科

Circle of *Sula*

‘Correlation of the two’

ISHII Sumiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this paper I study the circle of *Sula*. The most important thing that I consider in this work is the "two kinds of consciousness and two subjects" continuity for the future. This "two kinds of consciousness and two subjects" is not only Sula and Nel but also a writer and a reader. We purify the work and take it in for ourselves. The tale will continue forever as if dandelion spores that are spread out everywhere. That is how our identity is inherited from generation to generation.

はじめに

*Sula*¹(1973)の作者 Toni Morrison²は現在黒人女性作家としてその地位を築き、Nobel 賞を受賞するなど活躍は目覚ましい。しかし彼女の初期作品 *The Bluest Eye*³と続く *Sula* が発表された当時の批評は芳しくなく、「書評は地方色作家としてしか残らないだろうと予言した」⁴のである。しかし後に「バーバラ・クリスチャンが 1980 年に出版した『黒人女性小説 ある伝統の発達、1892 年～1976 年』⁵に端を発した「黒人女性学批評」⁶により、初期作品は評価を受けるようになったのである。

彼女の作品は常に言葉を意識し、1つのものを2つの意味で語ったり2つのものを1つのものとして現したりする。このことを荒このみ氏が

トニ・モリスンの逆転の論理はさまざまな姿形をとってあらわれる。『ピラヴィッド』(1987)のエピグラフに書かれた「わたしは、わたしの民でなかった者を、わたしの民と呼び、愛されなかった者を、愛されし者と呼ぶだる

う」(ローマ人への手紙、第9章25節)という聖書の引用は、モリスン文学に見られる姿勢をよくあらわしている。(略)このような逆転の関係こそトニ・モリスンが作品のなかで描こうとしていることがらなのである。⁷

と指摘するように Toni Morrison の逆転の関係を読み解くことで彼女の作品をより深く理解することができるのである。

Sula という作品はこの逆転の関係を顕著に意識させられる内容・文体・言葉を含んでいる。以下この作品から導き出された自らの考察を述べたい。

1. 再話物語として読む

再話物語とは昔話やフェアリーテイルなどの口伝えの物語である口承文学のことを指し、「語る者」と「聴く者」が存在することでその物語を継承していく。*Sula* が再話物語であると考察する点は次の3点である。

Sula が死に際にドレッサーの上に置かれた“An empty pocketbook”を見ていると Nel が想像する

この場面で Nel が探しているものは薬をもらうために必要なお金である。しかしこの回想を語る Nel はあえて“An empty pocketbook”という言葉を用いているのだ。これは死を待つ Sula が見つめているのは空っぽの財布ではなく、文字の書かれていない白紙の本と鏡台の鏡に映る自分たちを見つめていたとを感じるからである。白人でもなく男でもない“I'm me.”(28)になると Nel は鏡に向かって自分に言い聞かせて生きていた。その彼女をそのまま自分の瞳に映してしまった Sula との成長の記録が白紙の単行本でしか語れないものなのである。

この“An empty pocketbook”とは文字化することで複雑化され詳しい描写になり、装飾されることで本当に伝えたいものが見えなくなってしまうことを避けるための二人の手段なのである。文字のない口承文学は聴き手が物語を単純化し、自己修正をしながら語り手とならなければならない。彼女たちはもう一度彼女たちが過ごしてきた時間（歴史）を記憶の中で物語を語るように見つめ直そうとしているのだ。

Eva が Plum との昔話を語る時に二つの声が聞こえるということ

口承である物語を語る声は一つではなく二つの声がある。それは語る者は聴くことができ初めて語る者になれるからである。口承とは語る者が聴く者に意志という息を吹き込む作業であり、聴く者は純化⁸し自己修正して相手の意志を語られた言葉だけに乗せて発する。

When Eva spoke at last it was with two voices. Like two people were talking at the same time, saying the same thing, one a fraction of a second behind the other.
(71)

Eva が息子 Plum の話を語る時 2 つの声が

Hannah に聞こえてくる。Eva の言葉にほんのわずかなズレを聴き取り、二つの声が重なっているのが Hannah にはわかるのである。この不思議な感覚は一つの旋律を複数人で歌う時に発生する自然のズレである、教会で賛美歌を歌う時などに現れる Heterophony⁹に似ている。Heterophony とは

Heterophony occurs most frequently in orally transmitted vocal traditions. For example, in some forms of African, Polynesian, and Black American Christian hymnody, each member of the congregation sings his or her own independent and highly embellished of the hymn, producing a complex web of vocal strands.¹⁰

であり、このズレは人間個々の持つ音の波長によって生じるもので音階やリズムによってできるものを指してはいない。言い換えれば違う体を持つからこそできあがるズレなのである。

語る者と聴く者、この2つは言い換えれば作者と読者との次の関係にあたるだろう。

読者と作者は「同じ者であるのだが」とバルトは書く。しかし両者が「分身」となり、ともに歩むことができるのは、両者が「ただちに差異化される」瞬間においてのみなのだ……似たもの同士がおたがいに鏡に映したような分身を見て悦に入る関係をアナロジックと呼ぶとすれば、ホモロジックな関係とは、ここにいう「差異」が姿を見せ、目に見えるようになる、そんな切迫した時間の裂けめにおいて成立するのである。

11

テキスト(物語)をつないで作者と読者は一体になるが、二つの関係はそれだけではない。テキストを通して読者が共時性を得ることがアナロジックであ

るならばホモロジックの差異とは自分ではない他者の発見なのである。この Heterophony 的なわずかな瞬時のズレは Eva 自身が語りの中で Plum を発見し、Hannah も Eva の中に Plum の存在を発見しているのである。

聴く者は語る者の感情をいち早く察知し、自己修正という純化の中で正確な復唱を必要とする。口承で受け継がれる物語はその喜怒哀楽ごと音として聴く者へと受け継がれていき、二つの心を引き継ぐのである。「それら言葉や物語の筋を通じて価値観・生き方・感性を伝えること」¹²が口承の目的であり、語られること・繰り返されることで個人と文化をつなぐ環となるのである。それは大人になって人格形成された後でも情緒の本質として消されることはない。2つの声が一の体から聞こえるということは、人から人へと価値観・生き方・感性が受け継がれているということであり、語る者の意志に環として繋がってきた先人の声を聴き取る感覚なのである。

Chapter Part1 と 1965 の時間の関係

Part1 と 1965 のチャプターは背景として同じ時間であるが、決して平行な時間の線上にはない。これは同じ時間であっても互いが影響することなく分離された状態にあるということだ。

始まりである Part1 はかつて存在したという Bottom の回想でありこの Bottom はゴルフコースが出来上がれば終わりを迎えてしまう。しかし Chapter 1965 の Bottom は Nel が Sula との友情を悟り、回想しつづけることで永久的に存在する Bottom が始まるのである。“A soft ball of fur”(174) が割れた瞬間である 1965 年から、Bottom における二人の時間の始まりである 1919 年に Nel の精神は向う。文字のない物語である 1919 年からの二人の物語を間違えることなく語りができるように復唱を繰り返さなければならない。1965 年から 1919 年がつながることで彼女たちの Bottom は繰り返し語られ、途切れることの無い環ができるのである。このことから考えると Part1 は 1965 年と 1919 年という2つの時間をつなぐ意識の流れ的部分と言える。Part1 という Chapter だけが数字を使用していないのは繰り返し回想されるお話ではなく、いつし

か忘れられてしまう物質としての Bottom ということ、そして“A valley man”(4)という客観的な視点で語りながら、Nel の意識が過去へと流れる過程なのである。1965 年と 1919 年の環を接着する現実から過去を回想していく流れ、それは Nel が白紙の単行本を広げて永遠の Bottom へと流れていく回想なのだ。

また、テキストが現在形として語られずに過去形から語られることで Nel は「今」に位置し、聴く者から語る者になるために物語を純化するための行為、それは記憶と言う無限の詳細をひとつずつ吟味し単純化することを行える無時間に居るということも意図している。Nel のこの物語を語る時間は限りなく今である瞬間でありながら客観的に物語を突き放す立場にも位置しているのだ。

そしてもう一つ、過去を過去の視点で語るという「小説の半過去の意味は、『時間的意味ではなくて、いわば空間的意味である。それはわれわれの眺めている対象からわれわれの位置をずらす』」¹³作用がある。テキストと共に読者は現在に位置しながら、ずらされた作者の視点から見ることで 1919 年からの話を Sula と Nel の物語として語り、もう一つの違う Sula の物語を作ることのできる空間を用意されていると考えられる。この空間から私たちは自分の中の他者である作者、そしてもう一人の自己を見つけることができるのである。

2 . Chapter を読む

作品の Chapter は「Part1」「1919」「1920」「1921」「1922」「1923」「1927」、Part2 では「1937」「1939」「1940」「1941」「1965」と西暦で書かれ、これら Chapter を通して、Bottom の空間は語られるのだが、この西暦で区切っていることと、最初と最後の Chapter にある時間を Barbara Christian は次のように挙げている。

As the beginning is in the end, the end is in the beginning. Time becomes important only as it marks an event, for the people of the

Bottom do not see its reckoning as an autonomous terminology . . . So each chapter is not about the particular year for which it is named rather some crucial event happens in that year which demands background, its whys and hows, the reasons for the event's significance.¹⁴

Bottom という空間は始まりが終わりであり、終わりが始まりなのである。意味付けとして年号を使用しているのではなく、背景である「何故」や「どのように」なのかという重要である出来事と理由だけを読者に示すためだと述べている。しかし Barbara が言うように作品中に出来事と理由が求められるかは疑問が残る。*The Bluest Bye* も最初の Chapter を見ると現在から過去を語っている作品であり、その中で “There is really nothing more to say except why. But since why is difficult to handle, one must take refuge in how”¹⁵ とあるように、出来事 Hows は語る事が可能だが、理由 Whys は語る事は出来ないと述べている。そして同じく *Sula* の Chapter1 の最後にもあるように、

. . . wondering even as early as 1920 what Shadrack was all about, what that little girl Sula who grew into a woman in their town was all about, tucked up there in the Bottom(6)

と出来事だけを述べようとしている。このことから *Sula* においても Shadrack と Sula、二人を受け入れたコミュニティたちに降りかかったことである出来事 Hows だけが語られて、理由 Whys を語っていないのである。

またこの Chapter が数字で描かれていることは出来事をただ語るだけでなく、この数字を通してその空間で過ごした Nel の時間、または成長(Grow)を述べるための意味がある。Nel は数字の Chapter にある出来事を通して大人になっていくがこの大人

になることは単に時間の経過を指しているのではなく、そこには Sula との友情や大人になって知らないことを知るようになる「経験」がある。この「経験」を数字で語るという行為は

われわれは個人面においても集団面においても自らの歴史の結果であること、自らの過去を引き受けることは正当性の第一条件であることを認めなければならぬ。「わたしはわたしの過去である」というサルトルの有名な確信は周知のこと……わたしの過去を同定すること、それは私の自己性を見いだすことである。¹⁶

Chapter が年代で書かれているということは、人間の Identity は過去から成立して、構築される過程は年代的だからなのだ。時間は「今」を重ね、意識の中で「過去」「現在」そして「未来」へと進んでいく。その「経験の経緯」という意識の中を語ることが、数字でなければ語れないことであり、この作品のどうしても「語らなければならない」もの、すなわち現在の彼女たち二人を Identify したものを指しているのである。

「空間(時間・場所・人)」を語ることが出来るのは出来事 Hows だけであり、またそれを語ることが出来るのは、現在と言う瞬間の中に立つ者である。文字ではなく音としてのみの語ることが出来る人、それは過去を知り、未来を展望する人間であり、語る者の声(not notice the adult pain)を聞いた聴く者だけなのだ。

Chapter Part1 と Chapter 1965 では、同じ時間という中でいながら、その中で視点は黒人と白人、そして語る者の声を聴いた者とそうでない者、痛みを知る人間とそうでない人間という対立が見られる。そして Chapter が数字で表わされるということで Chapter part1 と Chapter 1965 との間に切り出された表面的な時間と円環し続ける時間の対立が見られる。

3. 対立する言葉を読む

‘Love’と‘Like’

“.....I love Sula. I just don't like her. That's the difference.”(57)と Sula の母親は口にしている。この2つの違いは本当にあるのだろうか。SulaはAjaxが出てしまったときに、次のようなことを思う。

“When I was a little girl the heads of my paper dolls came off, and it was a long time before I discovered that my own head would not fall off if I bent my neck. I used to walk around holding it very stiff because I thought a strong wind or a heavy push would snap my neck. Nel was the one who told me the truth. But she was wrong. I did not hold my head stiff enough when I met him and so I lost it just like the dolls.”(136)

頭がもがれてしまったように感じるのは Sula にとって Love は理論的に相手を好きになることで母親から否定された自分である Like されないことから生まれた愛情だった。しかし一方 Jude が出て行ってしまった時の Nel は違う。

For now her thighs were truly empty and dead too, and it was Sula who had taken the life from them and Jude who smashed her heart and the both of them who left her with no thighs and no heart just her brain raveling away. (110-111)

頭だけが残されてしまったのだ。これは愛した男に渡したものは Sula とは違い、頭ではなく女性としての労働を意味するのではないだろうか。自分を棄て家族の為に生きることは Like の肯定というよりも Love の持つ女性(母性)特有の忠誠心に他ならない。

夫や恋人を失った時に、女性自身が頭か体の一方

しか残らないということは、Love と Like の一方でも欠けては意味がないことを示唆している。彼女たちの心理的な未完成な形は、人間は Love と Like が必要であることを述べているのである。

‘Look’と‘Watch’

大人になった Nel は、男に威厳を持たせ人間らしい心持にさせてくれる女を捜している Jude を目に映してしまい結婚する。後に Jude は家を出て行くのだが、Nel はその時に Bottom の他の女たちが言う次の言葉を思い起こす。

Now her thighs were really empty. And it was then that what those women said about never looking at another man made some sense to her, for the real point, the heart of what they said, was the word *looked*. (110)

Bottom で夫に逃げられた女は誰も目に映さない。それは Looked という事実、Jude を「見てしまった」ことが現在の彼女の不幸の原因なのだ。Nel は自分を殺し家族に仕えてきた結果、このような痛みを受けたのである。Bottom というコミュニティの女性は夫が家を出てしまった後、空っぽになった自分の太ももを埋めることは禁じられている。それは誰の瞳にももう自分を映し出してはいけないのである。

一方 Sula は、Nel との友情を失ってから「自分」を探している。そして後にも先にも自分と痛みを分け合う相手は見つからないと思っていた矢先に Ajax と恋に落ちるのである。Ajax と初めて出会った場面を回想するシーンで“Looking for all the world as he had seventeen years ago when he had called her pig meat.” (124)と彼の視線が12歳の時のように変わりなく注がれていたことを思い出す。それは、昔好きだった男の目の中に12歳の自分を見つけたのだ。しかし Sula はそれだけで満足が出来なかった。女として Nel のような幸せを求め始めたのである。しかし Ajax にはその変化が気に入らなかった。彼が愛した女は12歳の Sula であり束縛しない女が欲しかったのである。Sula は彼が出

て行ってしまった後でも、彼の最後を映した出口の傍にある鏡は祭壇のように思われる。彼女たちは異性の瞳に自分を Look したことで自分を Identify しようとしたが、それはお互いが失敗に終わる。

最終章で Eva が Chicken を川へ落としてしまったのは Nel を指しながら Sula だと言う時、“You watched, didn’t you?” (168)と Watch を使っている。Nel はその場において、See ではなく Watch していたというのだ。それは意図して見ていたことであり、Chicken が川へ放り出される瞬間を見たのは Sula でもあり Nel でもあると言っているのだ。子供を死なせてしまったこの事件から二人が学んだことは共謀の感覚¹⁷であり、彼女たちのその時まで培った Identity は子供を死なせた瞬間に焼き付けられてしまう。それは二人の人間が個として参加するのではなくそれぞれのもう一人の自分という他者にその罪をなすりつけ、それまでの Identity を保管する一つの出来事だったのである。

彼女たちの「見る」ことである Look には異性の瞳の中に映った自分になりたいと思う女心という受動的な意識があり、Watch の保管性は女性同士特有の共謀性を含んでいるのだ。

4 . Native American 口承史と比べて読む

この作品はネイティブアメリカンに継承される話と多くの類似点がある。比べてみたい

Peace & Deweys

Sula の祖母、Eva は他のコミュニティの女性たちとは違う。夫に逃げられた後片足をなくして帰郷するが片足の代金を得て子供たちを育て、今では家を増築し、来るものを拒まず引き受けている。男たちとも対等に渡り合い生活しているが、その基礎をなすのは全て夫への憎しみからだった。

彼女の住む土地は昔(5000年前)は、Iroquois がその栄華を誇っていた。この Iroquois は女性が統治し、「The Great Peace」と呼ばれる女たちが政治や、生活の糧などを一挙に担い、平和を守っていた。その中でも一人の女性が全ての実権を掌握していた。その女性は3つの食物、「とうもろこし」「カボチ

ャ」「豆」に名前を付けた話がある。¹⁸

Eva Peace も彼女と同じように3人の親を失った男の子に名前をつけている。しかし3人それぞれにつけた名前ではなく同じ Dewey と名付けた。彼らは

Deweys one was a deeply black boy with a beautiful head and the golden eyes of chronic jaundice. Dewey two was light-skinned with freckles everywhere and a head of tight red hair. Dewey three was half Mexican with chocolate skin and black bangs. (38)

と、彼らの姿が「とうもろこし」「カボチャ」「豆」に似ている。また彼らは Nel が結婚する時になっても

.....the Deweys would never grow. They had been forty-eight inches tall for years now, and while their size was unusual it was not unheard of. The realization was based on the fact that they remained boys in mind.(84)

このことから The Great Peace と Eva が同じ役割をしていたと考えれば、Eva は Deweys を大事な種として守り、Bottom という土が彼らに適していないと彼女は悟っていたのである。彼らは、1941年のトンネル崩壊事故で死んだことになっているが、

.....the deweys, whom nobody had ever found. Maybe, she thought, they had gone off and seeded the land and grew up in these young people in the dime store with the cash-register keys around their necks. (163)

と Nel が語るように Bottom 以外の土地で彼らは

Seed され、他の子供たちと同じように大人になったのである。

Eva はコミュニティの中で種を守る者としていびつに変形していく大きな家で、弱い人間を保護し、未来へつなげるための種をまく「培う女」¹⁹の役割を担っていると考えられる。

Shadrack と Sula

この二人は「灰色リスと赤リスの物語」²⁰から考えたい。この話はまだ一族が *The people had built their Long Houses in their Sheltered Vally*²¹の話で、新しい知恵を手に入れる為に村人二人を西と東に旅立たせたという灰色リスと赤リスの話がある。

灰色リスの旅は「何も新しい学びはなかった。しかし他の種族は体が異なる自分を怖がり客としては受け入れるが一員としては見てもらえなかった。そのような知恵を持って帰ってきたが、男女関係に関しての知恵はなく、まわりからちやほやされるうちに、異性と鬻ぎをかう関係を結び、最後には自分の村からも追い出されてしまう。」²²

一方、赤リスの旅は「荒れる荒野を渡り、カボチャの花の子供たちを見つけることができずに帰郷した。しかし背が高い草を見つけたことが最近の学びであることに気がつく」²³のである。

この灰色リスと赤リスは Sula と Shadrack と良く似ている。Sula は白人は黒人男性を恐れているが、愛しているということのを他の土地で悟ったと語っている。白人は黒人を受け入れこそするが仲間とは認めてはいないのである。そして彼女は灰色リスと同じで異性関係もルーズであり、男となら誰とでもベッドを共にしている。このことは同じコミュニティの女性から憎悪を買い、白人ともそのような関係を持つことで、黒人男性からも憎悪されている。死んだ後もその憎悪は消えることはない。また Shadrack は戦争へ行き、生を託せる種を見つけることができなかつたが唯一探し出した「死」が背の高い草だったのでないだろうか。その学んだ知恵、「死への恐怖」は自殺記念日としてコミュニティに受け入れられる。

結論

Sula は文字としての物語、音としての物語の両方を用いて表わされている。読書とは

視覚的認知を意識の中に送り込み、図像としての文字を、言葉の単位となる視聴覚的な像としての音声に変換し、その記憶を持続させながら、次の文字に視覚を移し、同じように図像から音声を浮かびあがらせ、それらのある一定の単位で結合しかつ切断しながら語や文節、あるいは文を編成していく²⁴

ことである。このことから考えればどのテキストが再話性を持つのは当然ともいえるのである。常にテキストには作者と読者、または語り手と聞き手が存在し、物語は継続されていくのである。そしてその空間に存在する言葉は

まず第一に、言葉の二重の意味、つまり熱情的か諦念的な意味で、自覚的態度決定の対象である。……もしかしたらその自己完結性を犯すかもしれない。というのは、空間がアンビヴァレントであるのは、きっとそれが、一見そう見える以上に多くのテーマと結びついているからなのだ。²⁵

テキストの空間では言葉は2重の意味、またはそれ以上の意味があり、このことは Toni Morrison の作品において他の作家には見られないほどの逸脱した特徴として用いられている。この特徴こそ荒このみ氏の言う「逆転の関係」であり、Sula に限っては上記で上げたように再話性を色濃く表面に出されたことで作品の空間に含む多くの曖昧性の為に奥行きが広がっている。何故なら昔話は完結した物語であって、過去から次に少し進んだ1点の時間までを語り後の未来への言及はない。語られるものは過去であり語り手の現在との切り離しによって時間のずれが生じている。ならんで文字を追う読書という行為

から作者は読者に機械的なテキスト通りの必然の連なりをも与える。読者として、我々は物語の世界であることを認知し自己の意識は最後まで保たれていくが、もう一方聴く者として空間の恣意性によって純化する過程の中で現れる思考の問い掛けで作られた自分の物語を作るのである。我々はテキストの中へいつしか取り込まれ、Native American によって受け継がれている昔話を聴き取るように、または視覚的文字を読みながら言葉の意味を追いつづけることで作品空間が曖昧となり、確かなものを必要とするのである。このようなことから現在という確かな足場でのみ読者自らの世界を作り出すように仕組まれていくのである。

Nel の意識の中で繰り返し語られるこの物語は女性二人の友情物語であると共に、二人の女性を語るための歴史を必然的に語ることで、もう一人の聴く者(読者)に客観的な立場を与え、聴く者が語る者となる為に自己修正するという再話物語の特性によって、聴く者(読者)にあわせた多様な意味を選択させるという意図がある。

2 度目に繰り返される思念的な Bottom は聴く者(読者)が純化し、人種・国・宗教などのそれぞれ違った共同体へと変化し、その中にいる女性としての立場を考える物語として再話されていくのである。二人の少女が語った物語は“dandelion spores”(174) となって聴く者(読者)の中へ入り込みその人間の意識という栄養を受け取り、花を咲かせ綿毛となり、また次の聴く者(読者)へと繰り返して生きていく。始まりが終わりであり終わりが始まりであるように途切れることなく円環していくのである。

この作品は文字で書かれた文学における「作者と読者」との関係、再話物語として位置付けた「語る者と聴く者」という立場の関係という2つの広義の中から、作者と読者・語る者と聴く者それぞれが *Sula* というテキストを通して未来へ向けて Identify していくのである。

Notes

¹ Toni Morrison, *Sula* (New York: Alfred. A. Knopf UP, 1993), 以後 *Sula* からの引用は全てこの版を用い、ページ数のみを本文中に括弧内に表記する。

² Morrison, Toni. African-American writer noted for her examination of the black experience, particularly the experience of women within the black community. She received the Nobel Prize for Literature in 1993 (Encyclopedia of Literature, Merriam Webster's Massachusetts: 1995)

³ First novel by Toni Morrison, published in 1970. This tragic study of a black adolescent girl's struggle to achieve white ideals of beauty and her consequent descent into madness was acclaimed as an eloquent indictment of some of the more subtle forms of racism in American society. Pecola Breedlove longs to have “the bluest eye” and thus to be acceptable to her family, schoolmates, and neighbors, all of whom have convinced her that she is ugly. (Encyclopedia of Literature, Merriam Webster's Massachusetts: 1995)

⁴ 木内徹、森あおい編著 『トニ・モリスン』(東京、彩流社、2000年)2頁

⁵ Christian, Barbara. *Black Women Novelists: The Development of a Tradition, 1892-1976* Green Publishing Group, Inc., 1980

⁶ 本間、『トニ・モリスン』2頁

⁷ 荒 このみ 『アフリカン・アメリカンの文学』(東京、平凡社、2000年)227頁

⁸ 「純化というと、なにかきれいにする、純粹にするという意味に受け取られますが、その意味は中身を抜く、あるいは実体を抜いてその言葉だけを残すということです。」

小澤俊夫 『昔話の語法』(東京、福音館書店、1999年)271頁

⁹ 原始的なポリフォニーの一種。複数奏者のユニゾンで微妙にずれたり外れたりすること。

「クラシック選科」

<http://www.t3.rim.or.jp/~atari/music09.htm#h>
2001.6.22

¹⁰ Xrefer. <http://www.xrefer.com/entry/344076>
2001.6.25

¹¹ 鈴木和成 『バルト テクストの快楽』(東京、講談社、1996年)261頁

¹² トーマス・L・ウェッパー 西川 進監修 竹中興慈 訳

『奴隷文化の誕生(もうひとつのアメリカ社会史)』(東京、新評論 1988年)369頁

¹³ ミシェル・ピカルル 寺田光徳訳 『時間を読む』

- (東京、法政大学出版局、1995年)、78頁
- ¹⁴ Barbara Christian, "The Contemporary Fables of Toni Morrison" Harold Bloom, ed. *Modern Critical Interpretations: Toni Morrison's SULA* (Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999) p.28.
- ¹⁵ Toni Morrison, *The Bluest Eye* (New York: Holt, Rinehart and Winston UP, 1993) p.3.
- ¹⁶ 本間、『時間を読む』181頁
- ¹⁷ 本間、『自己と他者』129頁 134頁を参照にした。

¹⁸ "Carnegie Museum of Natural History" 17 June. 2001

<http://www.clpgh.org/cmnh/exhibits/north-south-east-west/index.html>

¹⁹ Paula Underwood "Growing Woman" *The Walking People: A Native American Oral History* San Anselmo: A Tribe of Two Press 1993

²⁰ Paula Underwood "The Telling of Gray Squirrel" and "The Telling of Red Squirrel" *The Walking People: A Native American Oral History* San Anselmo: A Tribe of Two Press 1993

²¹ Underwood, p. 558

²² Underwood, pp572-pp579

²³ Underwood, p593

²⁴ 小森陽一 『出来事としての読むこと』(東京、東京大学出版会、1996年)、2頁

²⁵ ジェラルド・ジュネット 平岡篤頼・松崎芳隆訳 『フィギュール』(東京、未来社、1993年)、133頁

Works Cited

第一次資料

Morrison, Toni. *Sula* New York: Alfred. A. Knopf UP, 1993.

第二次資料

Bloom, Harold., ed. *Modern Critical Interpretations: Toni Morrison's SULA* Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999.

Morrison, Toni. *Playing in the Dark –Whiteness and the Literary Imagination-* Massachusetts: Harvard University Press, 1993.

Lubiano, Wahneema.,ed. *The House That Race Built*

New York: Random House, Inc.,1997.

赤祖父哲二 『フォークナー 現代史を生きる』東京、冬樹社、1977年初版

アンダーウッド,ポーラ(星川淳 訳)『ネイティブ・アメリカンの口承史 一万年の旅路』東京、翔泳社、2000年初版

大社淑子 『スーラ』東京、早川書房、1995年初版